

# 「守護神」としてのサメとワニ —フィリピン・パラワン島の事例—

国立民族学博物館・外来研究員 辻 貴志  
takashitsuji@hotmail.com

## 目次

1. はじめに—問題の所在
2. 「守護神」としてのサメとワニにかんする伝承の分布
  - 2-1. 日本
  - 2-2. 世界
3. フィリピン・パラワン島における「守護神」としてのサメとワニにかんする伝承
  - 3-1. 調査地の概要
  - 3-2. 調査期間と調査方法
  - 3-3. サメ
    - 3-3-1. 「守護神」としてのサメにかんする伝承
    - 3-3-2. サメにかんするその他の伝承
    - 3-3-3. サメにかんする情報
  - 3-4. ワニ
    - 3-4-1. 「守護神」としてのワニにかんする伝承
    - 3-4-2. ワニにかんする情報
4. 考察
5. おわりに

## 参考文献

### 1. はじめに—問題の所在

日本の南西諸島、東南アジア、オセアニア地域には、先祖が海難事故にあったさいサメに助けられたことから、サメを「守護神」とみなしサメ食を禁忌とする海洋伝承が広く確認できる。また、地域や伝承の内容によっては、サメではなく、ワニやウミガメ、イルカ、クジラといった生物が同様の役割を担っている。本稿では、まず、日本とその他、とりわけ東南アジアおよびオセアニア地域における世界における「守護神」としてのサメとワニを中心とした海洋伝承について概観する。そして、筆者がフィールドとするフィリピン・パラワン島における事例について、サメやワニにかんする情報とあわせて紹介する。最後に、なぜサメやワニといった生物を人びとが「守護神」として信望するのか、なぜこのような伝承が各地において確認することができるのかについて考察をおこなう。

### 2. 「守護神」としてのサメとワニにかんする伝承の分布

#### 2-1 日本

日本では、南西諸島で広くサメを守護神とみなし非食とする伝承が確認できる。『球陽』には、宮古島の統一者仲宗根豊見親玄雅が沖縄本島から宮古島に帰るとき、船が転覆して漂流中にサメに命を

助けられて以降、鯖祖氏を名乗り、サメ肉食を禁忌とする家系となったとある<sup>1</sup>。サメ肉を食べると吐き気がし、腹痛やじんましんが起これるという(源 1974、谷川 1975、1976、1986、矢野 1979、1981)。首里の大里親方宗森もまた遭難中にサメに助けられ、それ以降サメ肉食を禁忌とするようになった(源 1974、大城他 1976、矢野 1981)。同様の伝承は、那覇(矢野 1979、1981)、伊是名島(矢野 1979、1981)、宮古島、黒島、竹富島(後藤 1999、谷川 1986、矢野 1979、1981)、筆者が調査した範囲では西表島と小浜島にも残り、やはり特定の家系の人びとはサメ食を禁忌とするという<sup>2</sup>。宮古島では、イーヘーサバ(シュモクザメであろう)に感謝を込め、ヤギやブタの肉をサメにほふる「竜宮願い」という儀礼がとりおこなわれる(谷川 1986)。黒島では、サメが明和の大津波を起す物言いがあったという(矢野 1979、1981)。

日本本土においても、サメを信仰する習俗は幅広く確認できる。山口県周防大島泊清寺では、島民が海での遭難中サメに救われたことから「フカ地藏」を祀る(矢野 1980、1981)。愛知県渥美半島江比間では、明神の使者であるサメが遭難救助をして以来、サメ食が禁忌となった(矢野 1979、1981)。青森県北郡野沢村では、「サメ堂」という祠が作られ、サメは船魂の化身とされ、それを食うことは禁忌とされた。その見返りに、川での大漁が期待できた(矢野 1979、1981)。和歌山県田辺市内の浦では、ジンベイサメなどサメはカツオを追い込むエビス様とされ、サメは忌みの対象となった(矢野 1979、1981)。伊勢の伊雑宮では、的矢湾のなかを、例祭のとき7匹のサメが背びれを立てて参詣にやってくるという。この間、海人は海に入るのを禁忌とし、禁を犯せばサメに喰われるという(後藤 1999、谷川 1975、1976、1985、1986、矢野 1979、1980、1981)。愛媛県今治市龍神社でも、サメが参拝に来る毎月1日と15日は、たてぼし網漁を休み、水泳禁止にするという(矢野 1979、1981)。いっぽうで、サメ肉食が疫病と重ね合わさったことから、伊勢の磯部やその付近、東京都品川区の八幡神社の氏子は、サメ肉食を禁忌とするという(谷川 1986、矢野 1979、1981)。サメに代わって、イルカやクジラ、サケを守護神、祖先とし、食することを禁忌とする地域もある(後藤 1999、北国新聞社編集局編 1986、野本 2008、大林 1996、谷川 1986)<sup>3</sup>。

## 2-2 世界

まず、オセアニア地域について、ハワイでは、サメを強い首長や海神、海での遭難救助や魚を捕らえる手助けをする存在、タヒチでは一族の安全を守る祖先、海神の使者などとして信仰と食禁忌の対象とする(後藤 1997、1999、2001、2002、2008、矢野 1979、1980、1981)。トンガでは、サメは一族の守護神とされる(後藤 1999)。パプアニューギニアではワニを神聖視する。サタワル島、マライタ島、トラック諸島ファーナッカル島では、サメやエイは、神の使い、人間と同等の存在として食禁忌が生じる(秋道 1973、1984、後藤 1999、石森 1985、大島編 1977)。マライタ島には、サメが海で遭難した人を助けたという伝承がある(後藤 1999)。フィジーでは、王がサメに乗って島に上陸したという伝承から、サメは始祖としてトーテム信仰の対象となる(後藤 2003)<sup>4</sup>。ソロモン諸島では、サメは神の使い、死霊、人間と霊界との媒介者、カツオ漁を手助けする存在とみなされる(後藤 1999)。すべての漁師は各家族を守護するサメを定めているという(矢野 1980)。ニュー

1 豊見氏親については、サメへの敵討ちの伝承も残る。その結果、大いにサメ肉を食べるようになったとある(谷川 1986)。

2 沖縄県池間島では海人草を採集していた海人がサメに喰われて死んで以来、サメを食べなくなったという伝承もある(谷川 1986)。

3 谷川(1986)は、サメの守護神としての役割が、北上するにつれサケやイルカに取って代わり、海人の侵入がこうした転化をもたらしたとする。

4 ウミガメにも同様の位置づけがなされる(カー 1978)。

ヘブリデス諸島では、サメは精霊の化身とされ（後藤 1999）、年1回サメ祭がある（矢野 1980、1981）。ティコピア島では、カツオが神の子とされ、サメはそれを招く神の使いとされる（後藤 1999）。なお、メラネシア（大石 1983）およびマイクロネシアではワニもまた神聖視される<sup>5</sup>。

東南アジアでは、ミャンマーのモーケンのあいだで、海難事故にあった先祖を陸に送り届けたことからサメ<sup>6</sup>やエイを親近視する（Ivanoff 2001）。インドネシア、マレーシア、ラオス、ベトナムにおいても同様の神話や伝承が確認できるが（大林 1977、Marsh 1988、Shim 2002）、サメはワニに転化している（後藤 1999）<sup>7</sup>。

### 3 フィリピン・パラワン島における「守護神」としてのサメとワニにかんする伝承

#### 3-1 調査地の概要

調査は、筆者がこれまで継続して調査をおこなってきたパラワン島南部バタラサ郡のサロン行政区でおこなった。同行政区の人口は1460人（314世帯）である（Municipality of Bataraza 2009）。民族構成は、パラワン（アニミスト）、モルボッグ（イスラーム）といった先住民を中心に、ジャマ・マプン（イスラーム）、パニムサン（パラワン・ムスリム）、タオスグ（イスラーム）、キリスト教徒（イロンゴ、ビコラノ、クヨノン）などからなる。

おもな生業は、焼畑農耕、ココヤシ園（コブラ採取）であり、若干の水田稲作（辻 2006）と家畜飼養（辻 2011）がおこなわれている。パラワン島南部では、近年マレーシア資本によるココヤシ園のアブラヤシ園への転換がかなり進んでおり、ちかい将来の大きな社会経済変化が予想される。また、バタラサ郡では日系資本によるニッケル鉱山開発が進み、鉱山会社の影響域では、インフラの拡充が進んでいる。調査地でも、発電機、トラクターの導入、先住民学習支援施設、モスクの建設などが鉱山会社の支援のもとおこなわれている。

沿岸域では、漁撈活動が積極的におこなわれている。漁法については、おおよそのところはすでに報告したが（辻 2005b）、カヌーを利用した釣り漁、竹いかだをもちいたえり漁、刺し網漁、貝類やナマコなどの採捕漁が中心である。2010年ごろからタツノオトシゴの採捕がブームとなっている。以前（2002年ごろ）は、女性たちがすくい網を持ってグループで小魚や貝などの採捕漁に出るのをよく目にしたが、今回の調査で男たちが押し網を持ってタツノオトシゴの採捕に出る姿をよく目にした。土地のパラワンの有力者が仲買人となり、仲間に押し網や水中眼鏡などの資材を供与し、タツノオトシゴの採捕にあたらせる。親族ネットワークを活かし、バタラサ郡の他の行政区でもタツノオトシゴの採捕がおこなわれるようになってきている。沿岸域の浅瀬で押し網を使い、ウミショウブのたぐいの海藻（lusay）に尾を結わえ棲息しているタツノオトシゴを採捕する。採捕されるタツノオトシゴは2種類（*Hippocampus hystrix*、*Syngnathoides biaculeatus*）で、仲買人は*H. hystrix*（undok-undok undokは「ウマ」の意）を一尾あたり13ペソ、*S. biaculeatus*（tulig buwaya「細長いワニ」の意）を12ペソで買い取る（1ペソは約1.9円）。買い取ったタツノオトシゴは、天日に干して乾燥させる。仲買人は、一定量のタツノオトシゴを確保したら、パラワン島の州都であるプエルト・プリンセサに出向き、中国人業者に1kgあたり8,500~10,000ペソで売る。タツノオトシゴを買い取る中国人業者は複数人おり、より高い値段で買い取ってくれる業者に卸す。

5 ポリネシアでは、サメがワニに転化されることはない。ポリネシアには、ワニの存在が欠落しているからである（後藤 2003）。

6 シュモクザメかトンガリサカタザメと推測される（Ivanoff 2001）。

7 サメを守護神とする神話や伝承の分布と変異は多様であり、ウナギ、龍、ヘビ、クジラ、ウミガメなどと相互変化するが（後藤 1997、1999、2002、西村 1928）、おおよそ海での遭難救助と霊界と人間界をつなぐ役割を果たす（後藤 1999）。

タツノオトシゴのほか、agar-agar（キリンサイ）の出荷もおこなわれるようになっている。

### 3-2 調査期間と調査方法

調査は2010年9月6日から9月11日にかけて実施した、調査の方法として、おもに調査票をもちいて、世帯訪問による聞き込み調査をおこなった。調査票の項目は、サメとワニにかんする1) 伝承、2) 食禁忌、3) 食利用、4) イメージ、5) 諸情報（サメやワニによる被害、漁・猟、流通など）からなる。1) 伝承について詳細に語れる人びとにたいしては、ボイスレコーダーをもちいて伝承を録音した（タガログ語で伝承を話してもらい、調査助手がテープおこしをおこなったうえで筆者が日本語に翻訳した）。4) については、意味のありそうな結果が得られなかったことから、調査の過程で調査項目から除外した。なお、人びとが認知するサメの種類を特定するために、図鑑（Allen 2000、A&A・フェッラーリ 2001、益田・アレン 1987）の写真を利用した。

### 3-3 サメ

#### 3-3-1 「守護神」としてのサメにかんする伝承

調査地では、3種類のサメが海で遭難していた先祖を救助したという理由で食禁忌の対象となっている。バタラサ郡南方に位置するバラバック島を出自とするモルボッグのあいだではアカシュモクザメ（koritan bingkung）、バタラサ郡のモルボッグのあいだではkoritan pindung（サカタザメ）、パニムサンのあいだではkoritan ombilidan（未同定）がそれぞれ守護神としてみなされ、それらを食べると体中がかゆくなるという（辻 2005a）。

#### 伝承1

なぜモルボッグがアカシュモクザメを食べることを禁忌とするのか。それは、このサメが海で遭難中の先祖を救助し陸まで送りどけたからだ。だから、モルボッグはその返礼として、アカシュモクザメを食べないことを約束した。もし食べると体がかゆくなる。

これまでの調査の結果（辻 2005a）、バタラサ郡のモルボッグがサカタザメを守護神とし、食禁忌の対象とすることを示したが、今回の調査ではサカタザメについては食禁忌の対象とせず、koritan parangangというサメをアカシュモクザメと同様守護神とみなし食禁忌の対象とすることがあきらかとなった。koritan parangangはサカタザメに似るが、頭部がより尖っているという（トンガリサカタザメではないかと推察される。またオオノコギリエイに近いと言う人びともいる）。このサメを食べると体が痛み、皮膚炎（galis-galis）が生じるという。リューマチの人はこのサメを食べてはいけないという。モルボッグのなかには、koritan ombilidanというサメ（このサメはトラフザメ、あるいはサカタザメに似るが頭部が尖っているサメであると人びとの見解がわかる）を同様の理由から食禁忌の対象とみなす人もいる。

以上のように、守護神あるいは食禁忌の対象とするサメのちがいがモルボッグのあいだでことになっている理由として、他民族との混血による価値観の変容がかんがえられる。以前、モルボッグがサカタザメを守護神とみなし、食禁忌の対象とすると回答したモルボッグは、ジャマ・マブンの混血で

8 パラワン島には、ある強欲な男が神をないがしろにしたことからサメに姿を変えられてしまったという、逆にサメを強欲の象徴としてとらえた伝承が残っている（Eugenio 1996）。

あった。今回の調査でkoritan ombilidanを守護神とみなし、食禁忌の対象とすると回答したのは、パラワンとの混血の人であった。

パラワンの場合では、koritan ombilidan（体色は黄色で、体は角張っているという。トラフザメだとかんがえられる）を守護神とみなし、食禁忌の対象とする。人間とは兄弟のような関係にあるサメだという。このサメを食べると、死ぬという。いっぽう、可食であるという意見もあるが、koritan ombilidanと定義されるサメがどの種類のサメを指しているのか現段階では定かではない。

また、サカタザメ（あるいはsudsudと呼ばれるサカタザメに近い種）を食べることを禁忌とするという人もいる。その理由として、親がこの魚を食べるのを禁止したからだという。サカタザメは海中を回るように移動することから、食べると目が回って頭がおかしくなり、気分が悪くなるという。関連して、マダラトビエイを食べないという人もいる。このエイが飛ぶようにして泳ぐことから、年寄りが他界するイメージを連想させるという。

パニムサンは、カラワあるいはパラワン・ムスリムと呼ばれる人びとで、他のイスラームとの接触によりイスラームに帰依したパラワンである。かれらがkoritan ombilidanを守護神とみなし、食禁忌の対象とすることはすでに述べたとおりである。ただ、かれらはこのサメをどう猛であるとかんがえており、モルボッグやパラワンがイメージするトラフザメやサカタザメであるか疑問が残る。このサメをサカタザメとみなす人もいる。

さらに、以上の民族以外にもジャマ・マブンとタオスグのあいだで同様の伝承が残ることがあきらかとなった。

ジャマ・マブンは、フィリピン南部スルー地域のカガヤン・デ・タウィタウィ島（マブン島）を故地とするイスラームである。おもに、ボルネオとの越境貿易や沿岸域でのコプラの栽培に従事してきた人びとである。かれらはサカタザメあるいはsudsud（サカタザメに近いサメ）を守護神とみなし、食禁忌とする。ジャマ・マブンとこの魚は兄弟のような関係にあるという。そのことを示す、つぎのような伝承が確認できる。

## 伝承2

ジャマ・マブンがサカタザメを食禁忌とするのは、海で遭難していた先祖がこのサメに救助されたからである。サカタザメは先祖を生きたまま陸まで送りとどけた。

タオスグは、スルー地域のホロ島を出自とするイスラームで、パラワン島南部を伝統的に統治してきたスルタンやダトゥなど支配的階級にあった人びとである。かれらのあいだでは、先祖が海難事故にあったさいサカタザメが助けたという理由で、この魚を食べることを禁忌とするという<sup>9</sup>。この情報はジャマ・マブンと混血したタオスグから得たものであり、ジャマ・マブンの守護神とするサメと共通していることに注意しておきたい。

9 また、ジャマ・マブンのなかには、オニカマスが海で遭難していた先祖を助けたという理由で、食禁忌とするという人もいる。rumpi（赤い魚、未同定）やbagasan（未同定）といった魚を食べることも禁忌の対象となる。先祖がこれらの魚に助けられたという。釣れても海に戻すという。

### 3-3-2 サメにかんするその他の伝承

#### 伝承3

ツマグロというサメは、台所で焼かれたのでやけどして、ヒレの部分が黒くなった。このサメも人間に近いサメである。このサメは海の中に家がある（パラワン、モルボッグ）

#### 伝承4

海で釣りをしていたとき、サメか大魚に飲み込まれた。ナイフで魚の腹を割くと島に着いていた<sup>10</sup>（ジャマ・マブン）

#### 伝承5

2人兄弟が海で釣りをしていた。釣針が岩に引っかかり、弟が海に潜った。兄が助けようとしてサメに喰われた（1910年から1947年ごろにじっさいにあった事件だという）。そのときサメの家が海のなかにあったのを確認した。弟は言葉を発しなかったが、兄は言葉を発したのでサメの餌食となった<sup>11</sup>（ジャマ・マブン）

#### 伝承6

多くのパゴタランはサンゴトラザメを食べない。このサメは海の中にあるサメの家の便所に住んでいた。だからこのサメは臭いがきつく、だからパゴタランはこのサメを食べようとしない（パゴタラン<sup>12</sup>）

### 3-3-3 サメにかんする情報

#### サメ漁

サメ漁は、大型の釣り針（berit）をもちいた延縄漁（kitang）と刺し網漁（pukut）がおこなわれていることを確認した。調査地ではサメ漁に従事する2人のモルボッグがいるが、調査期間中1人はラマダン中、もう1人は不在であったことから乗船調査はかなわなかった。

刺し網漁について、網目が10センチ角の大型の刺し網を利用する。網の長さは190mほどで、20kgのおもりがつけられている。20尋の深さに網を、漁場の底に仕掛ける。網はナイロン製で、1kgあたり265ペソで購入する。漁具に20000ペソほどの出費が必要だという。

出漁時間帯は、朝3時ごろ出漁し、朝6時ごろに仕掛けた網を揚げる。サメ漁の時期は、1月と2月はバタラサ付近では風が強いことから、バラバック島方面でおこなうという。ガソリン代に10000ペソを要するという。3月と4月は風が強いが、5月から8月ごろがサメ漁に適した時期だという。9月から12月はバタラサの沿岸域で操業するという。漁場の選定には、魚群探知機をもちいるという。ヒレが高値で取引されるsudsudというサカタザメに似たサメ（エイ）のほか、エイがおもな漁獲対象だという。漁獲したサメは、バタラサ内で売るといふ。州都のプエルト・プリンセサへは鮮度が落ちることから運ばない。

10 この伝承は「ヨナ型」神話との結びつきを連想させる。

11 この伝承は、出漁中に口笛を吹いたり、大きな魚について言及することで海難事故にあうというモルボッグのあいだでの俗信（辻 2005a）と関係しているとかんがえられる。

12 パゴタランはフィリピン南部スルー地域のパゴタラン島を出自とするイスラームである。パゴタランのあいだでは、ジャマ・マブン同様、オニカマスが海難事故で遭難中に先祖を救助したといわれ、食禁忌の対象となっている。

## サメ食

質問紙により民族ごとのサメ食の禁忌の有無について確認したところ、パラワンは12人中6人がサメを食べると回答した。モルボグは9人中6人、ジャマ・マプンは5人中5人、タオスグは1人中1人、キリスト教徒は2人中2人が食べると回答した。サメを食禁忌とすると回答した人は、全体の約48%であり、混血、世代間ギャップなどもサメ食の禁忌に影響していることがかんがえられる。

サメは、おもにゆがいたのちココナッツミルクで煮たpansakという調理法で食される。肝臓や腸も食用にされる。

パラワン島南部の山地先住民たちは、定期市のおりに好んでサメやエイを買いもとめるが（野口 1979）、その理由として、エイやサメは臭いがよい、安い、骨がなくやわらかい、日持ちがする（2日間ほど）からだといひ、秋道（1973）や鷲尾（1993）の同様の考察を支持する結果が得られた。

## フカヒレ

フカヒレは、イスラームなどの仲買人によって買い取られ、マニラに運ばれるという。とくに、sudsudと呼ばれるサカタザメに近い種のヒレが最高級とされ、1kgあたり15000~20000ペソで取り引きされる。その他のサメ（シュモクザメ、ツマグロ、koritan ogis、koritan babanganなど）のヒレは、1kgあたり10000ペソだという。土地のタオスグによると、スルー地域ではサメの肝油を狙った漁がおこなわれているという。

## 3-4 ワニ

### 3-4-1 「守護神」としてのワニにかんする伝承

人びとは、だれもが口をそろえてワニを殺すことはしないという。食用にもしないという。なぜなら、ワニはもとは人間だったからだという。あるいは兄弟のような存在だという。また、予言者でもあるという。人びとはワニのことをロロ（先祖）と呼ぶ。ワニの卵を見つけても、近づいてはならない。ワニがえりに入っても逃がすという。ワニを食べると、肌がワニ状になったり、ワニに逆襲されたりするという。

人びとはワニを食べない理由として、つぎのような伝承を挙げる。いずれも、パラワンの人びとから採集したものである。

#### 伝承7

昔、われわれの先祖が体の麻痺による痛みで長年苦しんでいた。先祖はあるとき死にたいとおもった。すると男が夢の中に現れ、「いったいどうしたのですか」と先祖にたずねた。先祖は「痛みのせいで歩くこともできやしない。だから死にたいんだ」と答えた。「それなら明日の早朝、だれもいないときをみはからって川に行きなさい。ヤシ殻に7粒の米を入れてもっていきなさい」と夢に現れた男は言った。「わかりました。こんな生活がつづくようなら、むしろ死んだほうがましだ。あす川でお会いしましょう」と先祖は答えた。

先祖は翌朝、川に行った。すると大きく口をあけた大ワニが近づいてきた。「おお、きっとお前がわたしの夢に現れたのにちがいない。わたしはもはや生きているのがいやなんだ」と先祖は言った。そして、7粒の米が入ったヤシ殻を大ワニに投げた。先祖も同時にワニに向かって飛び

13 いずれのキリスト教徒もイスラームと結婚し、イスラームを信仰している。

14 サメの臭いは、イノシシ猟にもちいるピッグボムという爆弾にも利用され、爆弾にサメの臭いをしみ込ませイノシシを惹きつけるという。

込んだ。

先祖はワニに喰われたかとおもった。そのとき意識はもうろうとしていた。それからワニは歩き出した。どこに行ったのかはわからない。しかし、先祖はワニに喰われなかったことを悟った。そのときワニにまたがっていたような気がした。ずいぶん歩いたのち、たくさんの家がみえてきた。

その村のリーダーが先祖に食事をふるまった。そして、「何かお手伝いできることはありますか」と先祖にたずねた。「ここにいさせてくれませんか。そして、わたしの病気を治してくれませんか」と先祖は答えた。「わかりました。ではあなたに薬をあたえましょう」とリーダーは言った。

1週間ほど薬を飲むと、先祖の体の調子がよくなった。「調子がよくなったからそろそろお帰りになられますか」とリーダーは言った。「はい。近所の人たちもわたしのことをいろいろ気にしているかも知れませんが」と先祖は答えた。「では、お送りいたします。ただ、あなたの親族にこれから代々ワニを殺さないようにお伝えください」とリーダーは言った。「はい、約束します。ではわたしはここを去りますが、もしわれわれ先住民がワニを殺すようなことがあれば、どうぞご自由になさってください」と先祖は答えた。

リーダーは先祖を船着き場まで送ると、ワニに姿を変えた。そして、「くれぐれもワニを殺さないでください」と要求した。

以来、先住民はワニを殺さなくなった。

#### 伝承 8

われわれの先祖がワニについて言うところによれば、ある夫婦の子どもが3才になったときやせこけてしまい、病気がちになった。痛みのため食事をとることもほとんどできなかった。母親は子どもの病気が気がかりであったが、どうすることもできなかった。

母親はあるとき夢をみた。そして、朝早く川に行き、そこで見たもののうえに子どもを乗せ水浴びさせるようにとのお告げをさずかった。母親は朝早く起き、子どもを連れて川に行った。すると、まもなく大きなワニがあらわれた。

母親はワニに向かって「わたしたち2人に価値がなければ、食べてもかまいません」と言って、ワニの背に子どもを乗せ水浴びさせた。水浴びを無事終えると母親はワニに感謝した。現在とちがって、昔はこのように人と動物は共生していた。

ワニは母親に「われわれは敵ではない。われわれはあなたたちを殺さないし、あなたたちもわれわれを殺してはいけない。だからいまこうして助け合っている」と言った。ワニの背から子をおろしその場を立ち去ると、母親はワニに感謝した。それ以来、その子どもは年をとっても病気をしなかった。

よって、もしワニが捕えられていたら、いくらかかろうがワニが生きられるようわれわれはワニを助ける。人間は老衰でいつか死ぬが、病気をしない老人がいるのはワニに感謝の気持ちを出しているからだ。

伝承7では、ワニが先祖をワニの地（竜宮?）に連れて行き、先祖の病気を治したことが語られる。その返礼として、人びとはワニから自分たちを捕って食べないよう依頼される。伝承7と8では、ワニが病気を治す役割を演じている。いずれの民話もワニを畏怖の対象としているが、同時に自分たち



を守る守護神とみなしている<sup>15</sup>。

以上の伝承では、本来、ワニと人間は近い関係にあり、現在その関係性が崩れたことからワニが人を襲うという<sup>16</sup>。

### 3-4-2 ワニにかんする情報

#### ワニによる被害

パラワン島では、ワニによる人への被害がたびたび新聞などで報告される。ワニは2種類いる (*Crocodylus mindorensis*, *C. porosus*)。人びとはワニによる事件をよく記憶している。調査期間中、サメによる人への危害についての情報が得られなかったが、ワニによる事件についてはよく耳にした。人びとはサメより、ワニを恐れている。とくに、サメは舟をひっくり返さないが、ワニは舟をひっくり返して人を襲うという。

たとえば、つぎのようなワニによる事件を人びとは挙げる。いずれもバタラサ郡で起きた事件である。

- ・ゲリラの時代 (1940年代) に、水浴び中におじがワニに襲われ喰われた。
- ・1960年ごろ、釣りをしていたパラワンの男性がSungan radap (地名) でワニに襲われた。
- ・1970年代、Bukid-Bukid (地名) で釣りをしていたパラワンの男性がワニに喰われた。
- ・1977年、Sungan radapでアンサリという人物がワニに喰われた。
- ・1989年、妊娠4ヶ月のパラワン女性がBuladjon川でノコギリガザミを捕っていたときワニに喰われた。
- ・1995年ごろ、Lagpan川に潜ってダイナマイト漁をおこなっていたパラワンの男性がワニに喰われた。ワニは船をひっくり返したという<sup>17</sup>。
- ・2000年ごろ、Iwahig (地名) でワニによる事件があった。男性が右ふくらはぎを喰われた。
- ・2005年ごろ、えり漁中にワニらしきものに襲われかけた。

#### ワニ狩り

1940年ごろ、ワニ皮を採取する目的でウビアン (スルー地域のウビアン島出身のイスラーム) によりワニ狩りがおこなわれた。皮はマレーシアに運ばれたという。当時ワニ皮は30ペソ程度で取り引きされた。

1950年ごろ、サマル (スルー地域のサマル島出身のイスラーム) によってもワニ狩りがおこなわれていた。夜、懐中電灯をもって猟に出、ワニをみつけると懐中電灯をあてる。そうすればワニは逃げないという。そして銚で突いてワニを捕った。ワニ皮 (靴用) はマレーシアに運ばれ、2リングギット程度で取り引きされた。

ジャマ・マブンもワニ狩りをしたという。ダイナマイトをもちいてワニを捕ったという。

今日、ワニはプエルト・プリンセサのクロコダイル・ファーム (1987年JICAの援助で設立) で保護されているが、その皮や肉の利用について具体的な方策がないのが現状である (Crocodile Farming

15 そのほか、祖母が川でワニに喰われたが、7日間ワニの腹の中で生きていた。以来、食べるのを禁止したという話や、川で水浴びのさい、夫婦がセックスをしてワニの卵を産んだ、などの話が確認できた。

16 あるいは、5本指と4本指のワニがあり、4本指のものが人を襲うという。同様の伝承はボルネオ島の民族のあいだでも確認できる (Marsh 1988, Shim 2002)。

17 パラワン島のプエルト・プリンセサのワニ保護施設クロコダイル・ファームで大型のワニの骨格標本が展示されているが、おそらくこのワニの骨のようである。

Instituten.d.)。一般的にフィリピンの人びとはワニ (buwaya) を嫌い、悪徳警官のことをbuwayaと呼ぶなどよいイメージをもっていないことも、クロコダイル・ファームが計画したワニの里親制度による世帯収入向上計画がうまくいかない理由のひとつである。

#### 4. 考察

以上、フィリピン・パラワン島南部バタラサ郡の事例として、「守護神」としてのサメとワニの伝承についてみてきた。人びとはサメやワニにたいする恐怖心を抱きつつも、それらを畏敬していることがあきらかとなった。では、なぜ人びとはサメやワニといった生物を「守護神」として崇めるのか、そして、なぜこのような伝承が諸民族間において共通して確認することができ、ひいては世界各地に広く見出せるのであろうか。

本稿でとりあげた人びとは海や川といった水界である自然を利用して生きる人びとである。水界は人間にとって生死をわける世界である。万葉集 (巻6-1003) には、「海をとめ玉求むらし沖つ波恐き海に船出でせり見ゆ」と歌われているが (佐々木 1927ab)、水界は人間にとって恐怖の世界である。その恐怖の具体的な対象は水難事故であり、サメやワニといった生物による危害であった。海を利用して生きる人びとのあいだでは、潜水病とともにサメによる襲撃が恐れられた (鶴見 1993)。『魏志倭人伝』には、「文身し亦以て大魚、水禽を払ふ」とあるが、文身の習俗は、北はエスキモー、シベリア、アイヌ、南は琉球、台湾、呉越、雲南、古代ベトナム、ラオス、ミクロネシアなど広域に分布した。それは、水中事故や水中の動物の攻撃を防ぐ目的でほどこされた (朝日新聞学芸部 1986、吉岡 1996)。ヤップ島やパラウ諸島では、サメのかたちを彫り、水中でのサメの攻撃を避けた (吉岡 1996)。サメやワニは水界に君臨し、人間に危害を加えるどう猛かつ恐怖の対象である。しかし、人間の手に負えない脅威は、ひるがえって神聖視・神格化されるものである。たとえば、人食いザメから「守護神」としてのイメージの転換である。こうした転換は、神話や民話、禁忌として人びとのあいだで受け継がれてきたとかんがえられる。人間はサメやワニといった自然を神聖視・神格化することで、人知に負えない自然の驚異を緩和しようとしてきたのではなかろうか。そのことは、『古事記』(1963、楠山 1983) の「因幡の白ウサギ」や「豊玉姫」の話から読み解くことが可能である。『古事記』では、サメ (ワニ) は神聖で、海人の使者とみなされる。「因幡の白ウサギ」の話は、ウサギが神の使いである聖なるサメを侮辱したことにたいする罰、「豊玉姫」の話では、サメとの婚姻による一体化による人間界と自然界との調和を、サメにたいするタブーの侵犯により台無しにしてしまったことが読み取れるのである。人間はこのようにしていったん崩壊した人と自然との関係を再構築しようとして、あるいはさらなる被害を回避するためにどうもうな自然であるサメやワニを「守護神」として祀りあげたのではなかろうか。

フィリピン・パラワン島バタラサ郡の事例では、「守護神」としてのサメが民族間によって異なることが確認されたが、このことについてはパラワン島の歴史が大きく関係しているとかんがえられる。パラワン島南部は15世紀に誕生したスールー王朝の支配下にあった。スールー王国は、ボルネオ、スラウェシ島東部あたりまで拡張していた (Warren 1997)。スールー王国内の勢力争いに敗れた、スルタン (ハロン・ナラシッド) がパラワン島南部バタラサ郡に移り、そこに君臨した。スールー地域からタオスグやジャマ・マプンといった民族が流入し、モルボッグやパラワン、パニムサンといった先住民を支配下においていった (Eder and Fernandez 1996)。イスラームの到来により、沿岸域にいたパラワンはイスラーム化した。かれらがパニムサンである。モルボッグはバラバック島を出自とするが、スルタンに仕えるため、あるいは奴隷としてバタラサ郡にやってきた。モルボッグやパラ

ワンを間接的に統治したのは、ジャマ・マブンや先住民とイスラームとの混血者（カリブガン）であった。ジャマ・マブンやカリブガンは、モルボッグやパニムサンより優位な集団であった（Eder and Fernandez 1996）<sup>18</sup>。タオスグやジャマ・マブンはサカタザメを守護神とする人びとであり、モルボッグはアカシュモクザメ、パラワンやパニムサンはkoritan ombilidanを守護神とする人びとであった。それが、支配体制の中間にいた混血者のあいだで守護神とするサメの定義にゆらぎが生じたことで、今日の民族間の守護神としてのサメに分化が生じたのではなかろうか。後藤（2003）は、異なった社会階層は、異なった祖先に由来し、古代オーストロネシア社会は階層性を持っていたとし、その頂点がダトゥであるとした<sup>19</sup>。後藤の説は、本論における守護神としてのサメの分化が、タオスグ>ジャマ・マブン>パニムサン>パラワン+モルボッグ（バタラサ郡）>モルボッグ（バラバック島）という序列関係によって生じたのではないかということに一定の重きをあたえるものである。

本稿では、フィリピン・パラワン島の海を利用して生きる人びとの事例に終始したが、本論でも若干触れたよう日本の南西諸島、東南アジア、オセアニア地域にも同様の事例を幅広く見出すことができ、かつこれらの地域にとどまる現象ではなかろう。人びとの「守護神」はサメやワニなどさまざまに姿を変えつつも、超地域的・超文化的に確認していくことができるであろう。それは、自然を利用して生きる人びとの心性に根ざし、自然との深い付き合いかたのなかで生まれてきた人びとにとっての「規矩」のあらわれであるとかんがえられる。

## 5. おわりに

本稿では、フィリピン・パラワン島を中心に、日本の南西諸島、東南アジア、オセアニア地域における「守護神」としてのサメとワニにかんする伝承に着目した。しかし、本稿で示せた事例はほんのわずかなものにすぎないであろうし、ふじゅうぶんなものである。今後の研究では、より広域に範囲を広げ、関連する伝承について通文化的に拾い集めていく作業がもとめられる。

---

18 沖縄でも、宮古島の人は八重山の人の出自をコウモリ、宮古島の人は八重山の人をイヌの子孫だと言い合うこともあり（折口 1993）、島民間同士の優劣感としても生物は関与してくる。

19 サイパン在住のカロリン人はサメのほかカメを文身することからトーテム信仰やクラウン・バッジを意味すると推定されている（吉岡 1996）。

参考文献

- 秋道智彌 1973 「ソロモン諸島にみるサメ食—海産物と匂いの文化史」『UP』11、pp.12-18。
- 秋道智彌 1984 『魚と文化—サタウル島民族魚類誌』海鳴社
- Allen, G. 2000. *Marine Fishes of South-East Asia*. Singapore: Periplus Editions (HK) Ltd.
- アニー・カー (山下欣一訳) 1980 『パプアの民話』大日本絵画
- 朝日新聞学芸部 1986 『邪馬台国』朝日新聞社
- Crocodile Farming Institute. n.d. *The Beauty of the Beast: Conserving the Crocodiles of the Philippines-Comprehensive Report (1987-1995)*. Palawan, Philippines: Crocodile Farming Institute.
- Eder, J. and J.Fernandez (eds.). 1996. *Palawan at the Crossroad: Development and the Environment on a Philippine Frontier*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- Eugenio, D. (comp. and ed.) 1996. *Philippine Folk Literature: The Myths*. Quezon City: University of the Philippines Press.
- Ivanoff, J. 2001. *Rings of Coral, Moken Folktales*. Bangkok: Whitelotus Press.
- A&A・フェッラーリ (谷内透監修、御船淳・山本毅訳) 2001 『サメガイドブッカー—世界のサメ・エイ図鑑』阪急コミュニケーションズ
- 後藤明 1997 『ハワイ・南太平洋の神話—神と太陽、そして虹のメッセージ』中央公論社
- 後藤明 1999 『「物言う魚」たち—鰻・蛇の南島神話』小学館
- 後藤明 2001 「神々の表情—ハワイの神話的世界」『季刊民族学』97、pp.4-17。
- 後藤明 2002 『南島の神話』中央公論社
- 後藤明 2003 『海を渡ったモンゴロイド—太平洋と日本への道』講談社
- 後藤明 2008 『カメハメハ大王—ハワイの神話と歴史』勉誠出版
- 石森秀三 1985 『危機のコスモロジー—ミクロネシアの神々と人間』福武書店
- 北国新聞社編集局編 1986 『縄文からのメッセージ—魅惑の真脇びと』社会思想社
- 倉野憲司校注 1963 『古事記』岩波書店
- 楠山正雄 1983 『日本の神話と十大昔話』講談社
- Marsh, I.O. (com.and ed.). 1988. *Tales and Traditions from Sabah*. Kota Kinabalu: The Sabah Society.
- 益田一・ジェラルド R アレン 1987 『世界の海水魚—太平洋・インド洋編』山と溪谷社
- 源武雄 1974 『続・琉球歴史夜話』沖縄文教出版社
- Municipality of Bataraza. 2009. *Municipal Profile of Bataraza*. Municipality of Bataraza.
- 仲宗根幸市編 1983 『琉球の昔物語 (第1集)』海邦出版社
- 西村真次 1928 『万葉集の文化史的研究』東京堂
- 野口武徳 1979 「バタラサのくらし—キリスト教徒の入植とパラワン島南部」『季刊民族学』7、107-113頁。
- 野本寛一 2008 『生態と民俗—人と動植物の相渉譜』講談社
- 大石芳野 1983 『ワニの民—メラネシアの芸術の人びと』冬樹社
- 大林太良 1977 『邪馬台国—入墨とポンチョと卑弥呼』中央公論社
- 大林太良 1996 『東と西 海と山—日本の文化領域』小学館
- 折口信夫 1993 『ちくま日本文学全集 折口信夫』筑摩書房
- 大島襄二編 1977 『魚と人と海—漁撈文化を考える』日本放送出版協会
- 大城立裕・星雅彦・茨木憲 1976 『沖縄の伝説』(日本の伝説2)角川書店
- 佐々木信綱編 1927a 『新訂 新訓 万葉集 (上巻)』岩波書店
- 佐佐木信綱編 1927b 『新訂 新訓 万葉集 (下巻)』岩波書店
- Shim, P.S. 2002. *A Cultural Heritage of North Borneo: Animal Tales of Sabah*. Kota Kinabalu: Natural History Publications.
- 谷川健一 1975 「フォークロア入門」江上波夫・松本清張編『日本古代学の始まり』(市民講座・日本古代文化入門2)読売新聞社、295-334頁。

- 谷川健一 1976 『黒潮の民俗学－神々のいる風景』筑摩書房
- 谷川健一 1985 『女の風土記』講談社
- 谷川健一 1986 『神・人間・動物－伝承を生きる世界』講談社
- 次田真幸 1977 『古事記(上) 全注訳』講談社
- 辻 貴志 2005a 「フィリピン・パラワン島南部におけるモルボッグの民族魚類学的研究－市場経済下の民俗知識とその変容」『人間文化』20、pp.69-90。
- 辻 貴志 2005b 「パラワン島南部におけるモルボッグの漁撈活動の展開－焼畑低迷後の市場化とその今日的意義」『エコソフィア』16、73-86頁。
- 辻 貴志 2006 「フィリピン・パラワン島における先住少数民族の焼畑耕作とその民俗知識・儀礼に関する研究」『人間文化』21、pp.101-115。
- 辻 貴志 2011 「パラワン島南部の暮らしと家畜」『季刊民族学』136、pp. 52-54。
- 鶴見良行 1993 『ナマコの眼』筑摩書房
- 矢野憲一 1979 『ものと人間の文化史35 鮫』法政大学出版局
- 矢野憲一 1980 「サメのエピソード」『自然読本 魚』河出書房新社、185-203頁。
- 矢野憲一 1981 『魚の民俗』(日本の民俗学シリーズ5) 雄山閣
- 吉岡郁夫 1996 『いれずみ(文身)の人類学』雄山閣
- 鷺尾圭司 1993 『ギョギョ図鑑』朝日新聞社
- Warren, J. 1997. *The Sulu Zone in the Nineteenth Century in The World of 1896*. Manila: Ateneo de Manila University Press.